

第6章 口承史に映る国の輪郭

—新疆ウールド地域における人・地・病—

シンジルト

1 牧畜民にとっての歴史

「この人はこの地の歴史を調査しに来た」。筆者が調査したいくつかの内陸アジア牧畜地域で、知人が筆者をインフォーマントに紹介する時の決まり文句だった。これを聞くと大体の人は快く受け入れてくれる。だが実際その歴史を尋ねてみると、彼らはまず「知らない」と言う。そして「知らない」と謙遜したうえで長々と語り始める。牧畜民にとって歴史は学問の代名詞であり、身近なものでもある。新疆西部ウールド人もそうであった。

他の多くの牧畜民と同じく、ウールド人の書いた史書も少ない。また少数民族である彼らの歴史が国の正史に登場することはあっても体系的ではない。そして彼らは東西の両大国、清露と拮抗してきたジュンガル帝国の末裔であるため、その歴史はポジティブに取り上げられることはほとんどない。そこで彼らの語る歴史に正史と違う何か別の過去を提示してくれることを期待したくなる。だが、彼らの口承史は必ずしも正史を意識し補うものではなく、むしろ現実理解のためのものである。それを扱うことに意義があるとするれば、それは彼らが自らの置かれる現実をいかに理解し、その現実の形成をいかなる論理で受け止め、その論理と彼らを包摂する国家の論理がどのような関係にあるかを解き明かすことにある。

彼らにとって複数ある現実の中で、少数民族であるという現実は一面的にも集団的にも無視できないものとなる。個人次元でいえば、性別・年齢とともに

身分証明書に記されるなど、民族はその人の属性の1つになる。集団次元でいえば、ウールド人たちは、新疆というウイグル族主体の自治区の中のイリというカザフ族主体の自治州の中に暮らす、少数民族の中の少数民族という現実にある。両次元における民族的な現実とは、共和国の民族区域自治という制度によって大きく規定されたものだとするれば、彼らの現実を論じることは、結果的に国家のあり方を論じることになる。

自らが置かれる民族的な現実をめぐるウールド人たちの口承史に必ず登場する項目は「人」「地」「病」の3点である。外部から移住してきたカザフ人や漢人との関係史など、「人」をめぐる語りは、ウールド人にとって少数民族であることとはいかなる経験であるのかを端的に表す。そこで、ウールド人は自らが少数民族の地位にあることをおおむね甘受しており、その理由の一端を自集団の人口の少なさに求めていることが分かる。他方、人口が少ないがゆえに自治権を持たず、自治権がないため移住者によって土地の名前が改変されたり守護神が冒瀆されたりするなど、ウールド人にとって「地」をめぐる語りは、人口問題が自らの実存レベルの問題にも発展することを示す。「人」「地」の語りのいずれにおいても問題視されているのが人口問題であるが、なぜウールド人の人口が少ないかという究極の問いをめぐる展開しているのが、「病」の語りである。「病」の語りからは、国家とウールド人との間の一筋縄ではいかなる関係が存在することがうかがえる。

近年中国の西部少数民族地域における暴力事件に触発され、共和国の民族政策の良し悪し、その存続の価値をめぐる議論が、国の内外において発生している⁽¹⁾。個別論者の論点の相違を超えて、こうした価値評価を帯びた民族政策をめぐる議論のいずれも、民族（集団）と国家を排他的なものとして措定し、両者の関係に言及している点では共通している。しかしながら、このアプローチだけでは、複数の民族を包摂する国家が現に存在しているという事実、その存在を維持している論理の特徴を理解することに繋がらない。

その思想的な起源はどこにあり、多民族国家は民族政策を通じて国家を運営している。その政策は国家の意思の表れだとすれば、政策の実施現場に見られ

た人々の言動の性格は国家の様態を映し出すものとなろう。多民族国家あるいは地域大国たるものの様態をその内部の現場から洞察することが重要であれば、国家と少数民族の人間を結び付ける民族政策によって、人々の日常生活がいかに変化し、それをめぐる人々の理解や解釈がいかに展開しているかを掌握することが必要であろう。人・地・病をめぐるウールド人の口承史を軸に、遊牧帝国の末裔が共和国の国民すなわち少数民族として生きることの実情を民族誌的に記述することで、口承史に映る国の輪郭を浮き彫りにしていくのが本章の目的である。

2 変わりゆく人と人との関係

(1) 少数派となるネイティブ

ウールドは「最後の遊牧帝国」⁽²⁾とされるジュンガル帝国を樹立した主幹部族である。帝国は中露に拮抗した末、清によって滅ぼされた。清の侵攻とそれに伴ってもたらされた天然痘により、60万人の死者を出し、帝国全域が無⁽³⁾人化した。ロシアと直接国境を接するようになった清は、無人地域を埋めるべく国境警備隊として現在の内モンゴルや中国東北からチャハルやシベそしてダゴール人を派遣した。彼らは西遷（西方への遷移）の民とされる。また、現在のロシアのヴォルガ下流域で140年暮らしたトルグート部族も、ジュンガルの滅亡を知り、7カ月をかけ10万人の犠牲を払いつつ1770年にジュンガル盆地へ到着し、清の歓迎を受けた。彼らは東帰（東方への帰還）の民とされる。西遷の民と東帰の民も、現在、共和国の文脈では、祖国の統一に貢献したと肯定的に位置づけられる。

他方、清によるジュンガル平定の中、西はカザフやキルギス（クルグズ）地域、南はウイグル地域に逃げ込んだウールド人および清に投降し中国内地に移住したウールド人は、その後、新疆イリとタルバガタイ地域で清が設立した「ウールド営」という国境警備隊に編入された。その待遇はシベヤダゴール⁽⁴⁾など西遷の民より悪かった。この状況は20世紀初頭まで継続した。故郷に住み

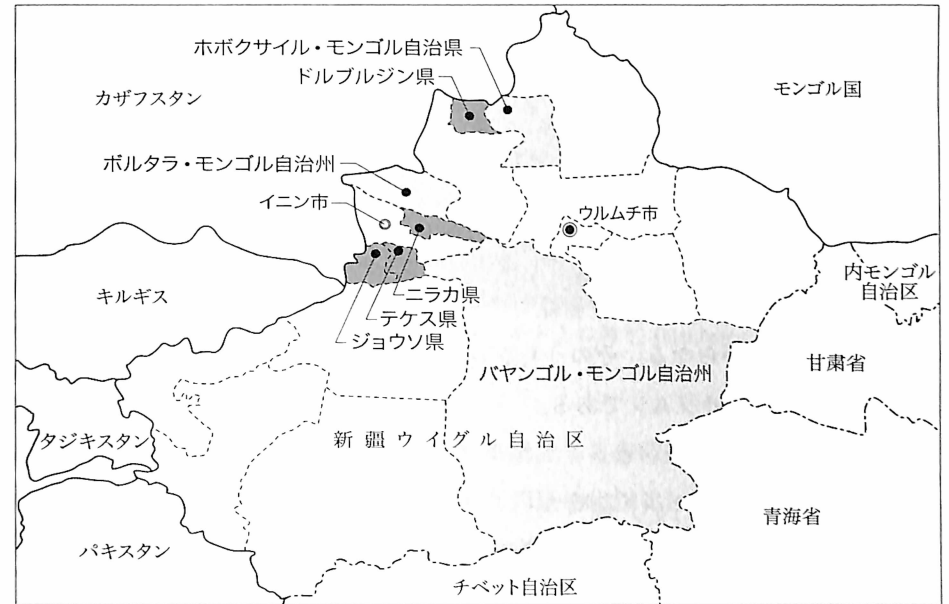


図6-1 新疆における主なモンゴル族居住地域

直した彼らを取り巻く状況は後にさらに変化し、カザフ人、ウイグル人、漢人の増加で彼らは故郷において少数派になった。

中国の公式民族区分では、上記のチャハル、トルグート、ウールドはいずれもモンゴル族の下位集団となる。新疆のモンゴル族（オイラトと総称される）は、新疆ウイグル自治区13の世居民族（この概念については後述）の中で、人口的にウイグル・漢・カザフ・回・キルギス族に次いで、6番目の世居民族とされる。人口絶対数こそ少ないものの（自治区総人口の0.86%）、モンゴル族主体の民族自治地域を3つ持ち、面積は新疆の3割強を占める（図6-1）。ホボクサイル・モンゴル自治県とバヤンゴル・モンゴル自治州の主体は東帰したトルグート部族であり、ボルトラ・モンゴル自治州の主体は西遷したチャハル部族である。西遷でも東帰でもないからこそ、ウールド人は土地本来の民（ネイティブ）と自認する。だが、イリ地区全体に占める人口比率が低いので、民族区域自治を実行する主体民族になれず、自治権を持てなかったと人々は理解する。⁽⁵⁾

ウールド人は、主にイリ・カザフ自治州が管轄するイリ地区のジョウソ（昭

蘇), テケス(特克斯)とニラカ(尼勒克)の3県, タルバガタイ地区のドルブルジン(額敏)県に分布するが、アルタイ地区そして中国東北にも少数が暮らす(図6-1のアミカケの濃い部分)。イリ・カザフ自治州の牧畜地域ではカザフ人が優勢を占めており、ウールド人にとってカザフ語はもはや外国語ではない。ウールド語(モンゴル語の一方言とされるオイラト語の一派。以下モンゴル語とする)からカザフ語に切り替えた場合、カザフ人との違いはほとんど見当たらない。ウールド人はソムンという組織でその共同体を構成し、イリ地区のウールド人は20ソムンからなる。そのうちジョウソソ県は6ソムン、テケス県は4ソムン、ニラカ県は10ソムンである。

(2) 多数派となるオールドカマー

ウールド人老婆A氏(83歳。2006年現在。以下同様)は、ニラカ県の牧畜民である。A氏の父はニラカ10ソムンの頭領だった。彼女はカザフ人が移住してきた当初の状況を述べる。

カザフ人は突如現れ、いまは我々の草原の多くを占領した。でも幼い頃、カザフ人が我々のところに来るとまずは父を訪ねたものだ。父はウールド人の家畜泥棒が捕まったら馬の尾に繋げて引き回し、牢獄に入れて鞭で打っていた。だがカザフ人の泥棒に対しては罰金をとっていた。扱いは違うけれど、その時ウールド人はいまより強かったので、カザフ人はウールド人の周囲を遊動していた。カザフ人は基本的に大人しくてサイン・ノタゲ(良い人たち)だった。

また、ニラカ県の老人B氏(80歳)によると、1930年代にソヴィエトから大規模に来たケザイ部族はウールド人と一緒に、それまでいたシェル部族を追出したという。突如現れ、自らを取り巻く多数派になるが、カザフ人の歴史に言及する際、ウールド人の語り口は必ずしも否定的なものではない。A氏にとってカザフ人は良い人たちだった。B氏のようにカザフに言及する際に用い



図6-2 ジョウソソ県ウールド人の踊り(Mannerheim C.G. 2008)

る表現は「カザフ」というよりもそれを構成する各部族の名である場合が多い。それらの部族は状況次第ではウールドと同盟を組むことも可能だった。さらに彼らは、ウールド人がカザフ人になった事例も知っている。

人々が語る過去においてカザフとはウールド人にとって身近な他者であったが、現在ではカザフ人ではないことこそ彼らがウールド人ひいてはモンゴル族であることの前提の1つとなる。とくにカザフスタン共和国の独立に伴い、ムスリムとしての意識が高まり、仏教徒であるウールド人との距離が広まったようだ。

新疆カザフ族地域では、カラ・ジョルガ(黒い側対歩の馬)という踊りが人気を博している。中国内地でも、カラ・ジョルガを「卡拉角勒哈」に音訳し、カザフ族の代表的な民族舞踊に位置づけている。テレビなどでカラ・ジョルガが披露されると、ウールド人は、「これは我々のジョロー・ハラ(黒い側対歩の馬)だ。カザフ人は勝手にカラ・ジョルガなんて名づけて、我々の踊りを盗んだ」と言う。根拠としてウールド知識人は、1907年イリ川流域で調査を行ったフィンランド人探検家マンネル Heim氏が著した書に掲載されたジョウソソ県ウールド人の踊りの写真に言及し、当時のウールド人の踊りと百年経ったいまの踊りとなんら変わりはないと力説する。

ジョロー・ハラがカラ・ジョルガになった経緯について、実はジョロー・ハラをカザフに伝えたのはカザフ人と結婚したウールド人女性の元ダンサーC

氏（60代）だったという。C氏の同級生だったウールド人によると、彼女はテレビでカザフ族と紹介されカザフ族として踊っていた。そこで、「カザフの嫁になった以上、仕方がない」と言う者もいれば、「イリはカザフ自治州だから、カザフになると出世しやすい」と言う者もいる。それまでカザフ族にはカラ・ジョルガがなかったという点で皆一致する。

突如現れたにもかかわらず、越境可能な他者であり、基本的に良い人たちであるというのが、移住してきた当初のカザフ人に対するウールド人の表象である。そこに一種の寛容ないし自負が見られるとすれば、それは特定の土地（草原）が特定の間人集団の所有物ではなく、実力者のものであるという観念を両者が共有していたことによるものであろう。他方、彼らは自分たちの踊りを盗んだというのが、民族区域自治を執行する主体民族となったカザフ族に対するウールド人の表象である。そこにカザフ族はウールド文化の抑圧者だという位置づけ、言い換えれば自分たちが主体民族になれなかったという自責が見られるとすれば、これは上記した観念の変化によるものであろう。

（3）裕福になりゆくニューカマー

同じ移住者ではあったが、カザフ人に比べて漢人は、ウールド人にとってニューカマーとなる。巨視的に捉えると新疆には2つの社会空間と時間体系がある。260万あまりの人口（2010年現在）を擁する準軍事組織「新疆生産建設兵団」⁽¹²⁾の兵団空間とそうではない地方空間であり、北京時間とそれより2時間遅い新疆時間である。兵団人口の85.5%を占める漢族を含む新疆漢族の多くは北京時間、ウールド人を含む多くの非漢族の人は新疆時間に従う傾向がある。他方、先述のように新疆には13の世居民族があるとされ、人口的に漢族はウイグル族に次いで2番目に大きい世居民族になる。⁽¹³⁾

2000年代以降頻繁に使われるようになった世居民族という漢語は localized nationalities または long-dwelling peoples、時として indigenous peoples とともに訳されるなど定着した英訳はない。ある土地に世代を越えて居住してきた民族集団を指すという文脈では先住民に近い。だが、イリ川流域、とりわけその牧畜

地帯における漢人の急増は共和国期に入ってからだろう。テキサスの老婆D氏（70歳）は言う。

1949年から多くの漢人が自動車で運ばれてきた。来たばかりの頃、彼らはまともに着る服すらなくて大変貧しかった。ウールド人幹部〔国から給料をもらう人〕の指示に従って、我々牧畜民は旗を掲げて彼らを歓迎した。彼らの住居を確保するため、牧畜民は3世帯ごとにゲルを1張り提供した。言葉が通じず彼らは我々と話すことがほとんどなく、我々が作った畑に入り、色々な植物を拾って煮込んで食べていた。やがて彼らの多くは幹部になって出世していった。残った者も我々より裕福になった。

遊牧帝国の末裔が畑を作っていたとは、いささか矛盾を感じさせる事実であろう。たしかにジュンガル帝国時代のウールド人はウイグル人を天山南路からイリ川流域に連行し農耕に従事させた経緯があった。彼らはウールド人にタランチと呼ばれ、自らもそれを名乗ったため、20世紀初期に「タランチ族」とみなされていた。⁽¹⁴⁾ タランチとは、農耕民を意味するモンゴル語のタリヤチンのウイグル語訛だった。当時ウールド人の観念においては、農耕は自分たちと無縁であり、自分たちはあくまでも牧畜民（マラチン）であった。だがこのことは実際ウールド人も畑を作っていたという行為自体を否定するものではない。⁽¹⁵⁾ 多くのウールド人老人は、「我々は昔から畑を作っていた。その基盤があってこそ漢人移民たちが農耕に従事することが容易であった」とすら自負する。

現在、ウールド人にとって農耕に従事し農耕民になることは何を意味するのか。老人たちの実経験に照らしていえば、それは1950年代における土地と人間の関係の再配置に規定されたものである。テキサスのE氏（75歳）は言う。

1950年代末、人民公社化のため個人所有がなくなり、家畜が山に移動させられた。家畜に従って一部ウールド人も山奥に移り住み、牧畜民になった。残りのウールド人は平原に残って農耕に従事し農耕民になった。移住してき

た漢人は当然平原に残った。

山に行く者を選ぶ基準は、家畜や牧草地をよく知っていることであつたという。こうした人やその子孫が現在彼らの間でいう牧畜民である。農耕民になつたウールド人は、1960年代の大飢饉に伴いさらに移住してきた漢人とともに、草原を大々的に耕し農作物を植え、固定家屋を建てるようになった。1980年代に請負制度が始まると、民族を問わず土地の使用権は世帯に分配された。E氏は、「農耕技術が低く怠け者の多い我々ウールド人の中には土地を漢人に貸し出してその賃貸料で生活する者も現れ、漢人の農業が広がった」と言う。

ウールド人の分類では、最も農耕が得意なのは漢族であり、次はウイグル族やモンゴル族で、最後がカザフ族である。草原の耕地化が進む現在のイリ川流域では、収入に見る民族集団間の格差も上記の順になるとウールド人は見ている。土地の利用形態の変化に伴い地域社会には新たな階層化が生じ、その事態は徐々に民族範疇にあてはめて表現されるようになってきている。だが彼らは、そうした事態を招いたのは他人のせいではなく、自分たちが怠け者だからだと自責的に理解することが多い。

自動車・幹部・貧乏が、移住当初の漢族に対する表象記号であれば、幹部・農耕・裕福は、移住後の漢族に対する表象記号であつた。貧乏だつた彼らのために農耕の基盤を提供したという自負も、農耕で広がった彼らとの経済格差に見られる自責も、土地は国家のものであるという観念の基での表れだつた。民族区域自治制度の中で自分たちの存在を意味づけるウールド人にとって、「突如現れた」カザフ族とは違って、自動車と幹部を背景に現れた漢族は国家と同一視される傾向にある。

3 土地をめぐる人々の軋轢

端的にいえば民族区域自治制度とは、特定の土地における特定の少数民族集団に一定の自主性を認めることで、その土地を領土主権下におさめ、その土地

の地域化を目指すための国家の法的措置である。「実権を握る書記長は所詮漢族の人間である」から、それは虚構だと民族区域自治制度自体に幻滅する人もいる。だが、原則として特定の民族集団がある地域の主体民族となつた場合、その出身者の政治的参加の機会が増え、その伝統文化も保護や発揚の対象になりうる。⁽¹⁶⁾人々が自治権に拘るのはこの原則においてである。

(1) 売国奴だつた先祖

ある初秋の夕方、筆者が調査から居候先のジョウソウ県ウールド人F氏宅に戻つた時、見知らぬ人たちができたての馬肉料理を囲んで筆者を待っていた。その1人の初老のG氏は筆者に挨拶する。「我々はチンギス・ハーンにこの辺鄙の地に残されたモンゴル人だ。にもかかわらず、来てくれてありがとう。(中略)調査はいかが。どこに行ったのか。」「ゲデンに行ってきた」と筆者が答えると、G氏は一瞬戸惑つた顔で「そこは[清軍が]我々モンゴル人を鎮圧した地だ。行くべきではなかつた」と言う。

ゲデンとはジョウソウ県とカザフスタン共和国の国境線の間近に位置する小山の名であり、肉眼で国境の反対側の村落が確認できるため観光地としても注目を集めている。また、ジューンガル帝国最後の首領ダワチが率いる軍勢が、1755年に清軍に敗れた地としても知られている。ゲデンの山頂に、「平定准噶爾勒



図6-3 ゲデン碑を保護するために建てられる覆堂。画面左奥はカザフスタン共和国(筆者撮影、2006)

銘格登山之碑」という高さ2.95メートルの石碑がカザフスタン共和国に向かって高く聳えている。満洲・漢・モンゴル・チベットの4種の文字で書かれた碑文は、乾隆帝がジュンガル平定を記念するために揮毫したという。

石碑はゲデン碑と通称され、ゲデン碑はゲデン山の代名詞となる。ゲデン山は領土主権の象徴として、冷戦時の中ソ対立から今日まで祖国統一を唱えたり分離独立を牽制したりするために起用され、愛国主義教育の基地にもなっている。⁽¹⁷⁾この文脈では、清と拮抗した歴代のジュンガル帝国の首領がほとんど「民族分裂主義者」「売国奴」として位置づけられる。⁽¹⁸⁾清と戦った人たちを批判することに愛国の価値を見出す現代の人は、現在のウールド人を貶しめてはいないが、領土の神聖性を主張するために清と自己を同一化している。

他方、ウールド人にとって祖国を愛することと、先祖たちに対する否定を形象化するゲデンという山を忌避することは、彼らの中に両立する。ゲデンに行った筆者の行為がG氏を戸惑わせたのは、彼が観光客以上のものを筆者に期待し確信していたからである。ウールド人が忌避するものをモンゴル族の間人すべてが忌避すべきという確信である。G氏は、現代ウールド人を經由して18世紀のウールド人に現在のモンゴル族を同一化している。

(2) 祖国を愛する末裔

帝国の末裔であるウールド人は、共和国の国民すなわちモンゴル族になってから、祖国への貢献も要請されており、また本人たちもそのことを誇りとして語る。彼らの説明によると、1960年代、国境をめぐる中ソ関係が険悪になり、土地の主権をめぐる論争が多発した時、その地が古くから中国の地であることを証明するために地名調査が行われた。そこで清朝時代の地図が重要視された。地図に登場する地名のほとんどが、ウールド人の守備していた国境カルン（哨戒所）やその一帯で建てたオボの名前だった。調査側は地名の意味を住民に説明してもらう必要があったが、ニューカマーの漢人はもとよりオールドカマーのカザフ人にもその意味が理解できなかった。これに対してウールド人は地名の意味のみならず、それを命名した人の名、その末裔の居場所まで詳

しく説明できたとウールド人は自負する。

この自負を愛国の文脈で解釈することは十分可能であろう。中央アジアをめぐる中露両大国の競合の結果、ウールドを含む多くの仏教系牧畜民が中国側に編入されモンゴル族に認定されたからだ。中国民政部の機関誌『中国地名』に2001年、新疆国境地帯における地名の改変現象に警鐘を鳴らす論文が掲載された。新疆モンゴル人のこの著者は、中国とカザフスタンとの国境地帯のモンゴル語の地名を例に挙げて、それらがモンゴル語だったことが、清露から中ソ時代にかけていかに国益にとって重要だったかを回顧し、現在では地名が勝手に改変され、変貌した地名が国の正式の地図にまで時折採用されている。このことを放任しておけば、国の領土主権に負の影響をきたすのだと力説した。⁽¹⁹⁾

著者は直接明言していないが、挙げられた事例を見る限りでは、そこでいう「改変」というのはカザフ語への改変を指していることが分かる。ウールド人たちはしばしば次のように言う。

ある民族がその地域の主体民族となった時には、しばしばその地のあらゆる地名がその民族のものとして理解されてしまう傾向がある。イリ・カザフ自治州の場合は、もともと我々の先祖が残してくれたモンゴル語の地名がカザフ語として解釈されるのだ。カザフ語に音訳されたり意識されたりすることで、本来の意味が失われてしまうのだ。

このように、ウールド人が地名の起源に拘るのは、地域の主体民族となるカザフ人が「先祖の遺産を台無し」にしているからである。地名をめぐる人々の語りは、イリ本来の民はモンゴル族のウールド人であるという認識の表れであった。その自負は抽象的な愛国というよりむしろカザフ人が多数派となる地域社会におけるウールドの位置づけを意識したものである。

(3) 守れたはずの帝国のオボ

では、本来の民と自認するウールド人にとって、土地とは一体どのようなも

のだったのか。前項ではオボーに触れた。オボーは字義として高台を指すが、意味の展開として共同体同士の境界や土地の守護神を祀る場所なども指す。ウールド地域では、祀る人間集団の規模によって、昔は家族（ウルク）・部族（オトゴ）・地域（アイマゲ）・国家（ウルス）など異なるオボーがあったが、現在は家族・村・郷・県といった単位でオボーを祀る。

村以上の規模で行われるオボー祭に唱えられる祝辞には、現在のイリ・カザフ自治州だけではなく、新疆東部とモンゴル国西部に位置するアルタイ山脈、新疆北部とロシア連邦南部に流れるイルティシュ川、さらにバルハシ湖などカザフスタン共和国の東部など、ジュンガル帝国がかつて統括していた地の名が多く現れる。これらの地域の河川、清泉、高山の守護神に幸運や庇護を乞うのがオボー祭の主な目的である。

近年、新築のオボーも見られるが、ジュンガル帝国時代にウールド部族全体で祀っていたオボーはホンゴル・オボーだった。「帝国のオボー」ともいうべきホンゴル・オボーは、しかしながら、ウイグル族や漢族が多数を占めるある自治体の管轄下に置かれ、そのうち、地下資源の開発で破壊されてしまった。この出来事をめぐってウールド人の中には、次のような言い伝えがある。

20 ソムンの人間が来て大勢の家畜をさばいて祀った時には、ご機嫌だったホンゴル・オボーよ。ウイグル人や漢人が来て貴方の靈気を掘り出した時には、うんとも言わなかったホンゴル・オボーよ。

オボーとの関係から分かるように、ウールド人にとって土地は、人間の作用の客体だけではなく、人間に幸運や生きるための力を与えてくれる主体でもあった。ホンゴル・オボーに関する言い伝えは、オボー自体に対する絶望だけではなく、それを守れなかった自責の念も同時に表している。もしその地域の主体民族がウールド人だったならば、破壊されないばかりではなく、保護され、祀られていたはずだったからだ。

前節では、人間同士の関係変化の背景に見られる土地をめぐる観念の変化を

概観したが、本節では土地をめぐる人間同士の駆け引き自体を詳述した。領土主権の確立の障害として先祖は否定されるが、末裔はその領土主権を受け入れつつその範囲内で自らの地位を確保しようとする。国境地帯の地名の起源をめぐる自負、破壊されたオボーをめぐる自責のいずれも、自治権に対する彼らの拘りの表れであった。

4 病が結びあわす過去と現在

ウールド人の口承史には「もし」が多い。「もし18世紀に60万の命が奪われなかったら、いまの新疆には少なくとも700万人のモンゴル人がいるはず。新疆は新疆モンゴル自治区のはず」というのもその1つである。ウールド人にとってジュンガル帝国の崩壊は、清の軍事力というより、清が持ち込んだ天然痘によるものだった。かつて多くの首領を疫病で失い、歴史の節目には必ずといっていいほど疫病が関わっていたと人々はいう。現在のウールド人にとって直近の疫病は、1940年代に発生した「ウールド人だけにうつる」とされる疫病であった。そのため、ウールドの人口が激減し、自治権を持たないでいると人々はいう。この疫病は自らが置かれている民族的な現実の説明項にもなるのである。

(1) 1940年代の熱い病

ハローン・エプチン（熱い病）という総称で知られるこの疫病は、1944年から流行り、1945年頃に収束したという。人々の語りを総合すると、当時の様子は次のようになる。

人々は急に発熱し、かゆみを感じ、体を搔いている間に倒れていった。体の弱者は3日間以内、強い者でも1週間以内に死んでいった。やがてはキャンプごとに感染していく。死体処理する人間がいなくなるキャンプさえあった。

総称以外にこの疫病は、トムーあるいはキジグなどチフスを意味するモンゴル語で限定的に表現される場合がある。疫病の猛威を表すためシャラ・トムーという表現も用いられる。黄色を意味するシャラは、ここでは被害の激甚さを表す。牧草もなく家畜も疲弊するなど牧畜民にとって絶望的な季節である春を表す時には、ハブル・イン・ウルトゥ・シャラ（春の長い黄色）という。後に「シャラ・トムー」という民謡が生まれ、疫病の被害の深刻さをいまに伝えている。

これまでの「人」「地」をめぐる口承史のいずれにおいても共通に問われているのは、ワールドの人口が少ないという問題だった。集団人口の激減をもたらしたという意味で、1940年代における疫病の発生は、ワールド人に最も衝撃的な出来事となる。感染源の特定は人と人の関係、人と土地の関係の変容を理解するうえでも重要である。感染源をめぐる彼らの説明は多様だが、その内容はおおむね「文明」「帝国」「共和国」の3要素に連動している。

（2）文明の敵による病

筆者の調べた限りでは、ワールド人だけにうつるといふ疫病の発生を直接裏付ける文献はなかった。複数の中国語文献によると、民国期にモンゴルやカザフなど新疆牧畜地域に疫病が流行っていたという。流行の理由は牧畜民を取り巻く厳しい自然環境に加えて彼らの遅れた不衛生な生活慣習に求められていた⁽²⁰⁾。こうした疫病で、1935年からの10年間、新疆モンゴルの人口が半減したとの分析もあった⁽²¹⁾。

牧畜民の遅れた慣習つまり「文明の敵」に疫病流行の理由を求める説明は、実はワールド人の間にも受け入れられている。「遊牧民だった我々の先祖は、風呂に入る習慣もなく、虱だらけだった。そのようなモンゴル人が一緒に暮らしていたから、変な病に罹っても不思議ではない」という自責的な語りがそれである。だがこの種の説明だけでは、疫病はなぜ同じ牧畜民だったカザフ人にうつらなかったかという問いに満足な答えを出していない。そのため、モンゴル人だけにあった特定の習慣に絞ってその理由を求めることもよくある。

当時、モンゴル人にとって女性の髪の毛は長いほど美しかった。髪を長くみせるため、女たちがトホグというかつらをつける習慣があった。かつらの材料に馬の鬣^{たてがみ}が多用されていたが、人毛かつらも徐々に現れた。人毛かつらは中国内地の商人が持ち込んだ。当時、内地はちょうど日中戦争だったので、戦場で死んだ人間の髪の毛も使われていたが、かつらに付いていた虱を介して菌がワールドに入ってきた。

モンゴル人の慣習に限定したこの説明も、しかしながら、疫病は他のモンゴル部族にはうつらず、ワールド人だけにうつるといふ彼らの確信にすぐに繋がるものではなかった。

（3）帝国の敵による病

熱い病という意味で、この疫病は18世紀の天然痘とも関連づけられている。イリの歴史に詳しいジョウソウ県のワールド人H氏（40代）によると、「1940年代の疫病は、ワールド地域で流行ったが、チャハルやトルグートの所にはうつらなかった。清朝時代に満洲人が持ち込んだ天然痘ウイルスがワールド地域にずっと生き残っていたからだ」と言う。天然痘の症状の1つも、1940年代の疫病の症状も発熱する点で同じだったからである。

H氏と同様、ジュンガル帝国と関連づけて疫病の感染源を説明する人は他にもいる。しかしH氏と違って彼らは、宗派の問題を介して、間接的に帝国と感染源を関連づけるのだ。それはチベット仏教の一宗派であるニンマ派（紅帽派）の2人の僧侶にまつわるものである。ニラカ県の老婆I氏（75歳）は、親たちから聞いたことを語る。

オラーン・キード（赤い寺院。ここでは、ニンマ派の寺院）から2人の僧侶が来た。彼らはこの地域で説法を行うべきだといったため、人々が集まった。僧侶たちは黒いヤギの皮で作った袋を膨らませて、その袋を馬の尾につなげて走り回った。それから病気が流行り始めた。当時イリにモンゴル人が2万人

もいたが、それ以来激減した。⁽²²⁾

たしかに17世紀、ウールド部族を含むオイラト連合軍がチベット高原を制覇し、ニンマ派の勢力を破り、今日にまで至るチベット仏教におけるゲルク派(黄帽派)の主導的な地位を確固たるものにした。しかし、ゲルク派やゲルク派を支持したオイラト人に対して、ニンマ派が1940年代に「復讐」を行ったという史実は筆者の知る限りではなかった。仮に「復讐」があったとしても、なぜほかならぬオイラトの中のウールド人に対してのみ行ったのかという問いに上の説明は答えていない。

だが次の展開を見る限り、人々の説明はあながち整合性がとれないわけではない。僧侶とされる怪しげな2人は単なるニンマ派の人間だという説明と違って、前述したニラカ県のB氏は、実は彼らは満洲人と手を組んでいたと指摘する。なぜなら、「清末、満洲皇帝が新疆からモンゴル人の若者50数人を修業させる名目で内地に連れていった。彼らが帰ってくる時に菌を持たせた。その中に例の2人もいた」と言う。つまり清末に内地に連れられていった彼らは、ウールド人の宿敵満洲人に洗脳され、民国時に新疆に戻り問題の菌を撒いたという。ここで帝国と民国が繋がる。

(4) 共和国の敵による病

病原菌とウールド人攻撃という意図的な行為を積極的に結び付けて、感染源をより合理的に特定しようとする試みも見られる。筆者はある機会に、この問題に明るいと多くの人にいわれるニラカ県のJ氏(65歳)と出会った。J氏自身が博識であるだけでなく子供たちも中国内地の大学に進学するなどまさに地域の知識人一家である。彼は言う。

日本にいる君も知っているはずだけど、1940年代当時共産党と日本は戦争していた。日本軍がチフス菌に感染したネズミを放したり、人間にも菌を注射したりすることで、病が流行ったことを私はテレビで知った。症状もここ

と同じだった。よそから来た僧侶も731部隊に派遣されたに違いない。要するに1944年の疫病は日本・満洲・国民党によるものだ。三者ともに反共だったから、攻撃されるのは当然ウールド人だった。

反共とウールド人攻撃はどのように関連するのか。筆者の疑問に対してJ氏は、「ウールド人の先祖であるジューンガル帝国の人間と満洲人の先祖である清の人間とは敵だからだ。1944年は、日本がすでに化学兵器の実験段階に入った時であり、国民党が日本と協力して共産党を鎮圧していた時でもあった。時期は一致している」と言う。実は18世紀の敵と20世紀の疫病とを関連づけたのが、北京のある大学に通う彼の娘による情報だった。「娘の話によると18世紀新疆から中国東北に移ったウールド人の末裔も生物兵器の被害を受け人口が激減した。我々も彼らと同様に日本軍の犠牲になった」⁽²³⁾。

J氏の論の展開を可能にした論理は2つある。1つは友の敵は敵であるという論理だ。18世紀新疆から中国東北に移ったウールド人の末裔が、自分たちの「友」であり、その「敵」は20世紀の満洲やそれを支えた日本だから、現代新疆のウールド人にとって直接接点のなかった日本は「敵」である。1つは敵の友は敵であるという論理だ。1940年代ウールド人を支配した国民党が自分たちの「敵」であり、国民党の「友」は日本だから、日本はウールド人の「敵」である。2つの論理を総合すると敵の敵は友となる。被害者のウールド人は共産党側に、加害者側には満洲・日本・国民党が配置される。反共か否かを基準とするこの配置は、図らずも共和国のイデオロギーと重なる。ここで過去となった帝国や民国が現在の共和国と繋がる。

既述のように、病はどこから来たのかという問いに、文明の敵や帝国の敵によるものだった説明のいずれも、十全な答えを与えてくれなかった。ウールド人の宿敵である満洲を支援した日本によるものだというJ氏の試みは、その他の説明に対する単なる否定ではなく止揚であった。生物兵器を開発した日本を媒介すると、かつらをつける慣習と疫病の関係も、僧侶の来訪と疫病との関係も整合される。J氏がこの問題に明るいと人々に理解されているのはこの

ためであろう。

ワールド人に見られる過去の疫病に関する語りは孤立したものではなく、集団人口が激減したのはなぜかという広い問題領域の中で展開してきたものであった。すなわち病の語りを促したのは、自分たちには自治権がないという現実の方であった。そこで病は人口問題の説明項であった。しかしながら、その感染源をめぐる人々の語り口には多様性が見られた。それは人々が依拠する情報源と動員する論理の多様性によるものである。また、感染源の特定作業において病自体は被説明項となる。そして、先祖たちの遅れた慣習を自責する以外、感染源をめぐる人々の語り口は概して他責的であった。

5 口承史に映る国の輪郭

本章の冒頭で、民族区域自治制度に規定されるワールド人の民族的な現実を論じることは結果的に国家のあり方を論じることになると述べた。他方、「実権を握る書記長は所詮漢族の人間である」から民族区域自治制度は虚構だとの考えもあった。だが、本章で見たように、そのことを承知したうえで多くの人が自治権に拘っていることが分かる。「もし」自分たちが民族区域自治を実行する主体民族だったならば、「文化的抑圧」を受けることがなく、「帝国のオボ－」も破壊されることはなかった。さらには、「もし」疫病がなかったら、今日の新疆は新疆モンゴル自治区のはずだったとまでいうのである。

むろん国家を常に意識し、それに言及しながら日常を送る人はほとんどいない。だが、自集団の社会全体における位置づけについては無関心でいられる人も稀であろう。あらゆる集団が例外なく特定の国家に属する現代において、異なる歴史的文化的な背景を持つ集団が同一国家に所属するという事態は、必ず集団間の比較を生み出す。国家は個人にとって無形だが、それを可視化するのは人々の生活を方向づける各種の政策である。自分たちの存在を意味づける前提条件になっているため、少数民族となる国民にとって民族政策は支持すべきか否かという類のものではなく現実そのものである。

ワールド人にとって、現実において生じている多くの問題の起因が、自集団の人口が激減し地域全体に占める人口割合が低く、主体民族になれなかったという事実にあるとすれば、人口激減の理由を知ることは当然重要である。思索の末突き止められたのが近代に発生した疫病というものだった。現実における自集団の位置づけを根本的に規定してしまったのがその疫病であるからこそ、人々の関心はさらにその感染源の特定へと向かう。

感染源として特定されたのは自らの慣習という文明の敵であり、自ら樹立したジューンガル帝国の敵であり、日本という共和国の敵であった。敵という意味で、ワールド人だけにうつる疫病は、彼ら自身にとって一種の他者の記号になる。「帝国の敵による病」という文脈における他者は、主に彼らの歴史の内部から立ち上がったものだとなれば、「遅れた慣習による病」や「共和国の敵による病」という文脈における他者は、外部から導入されたものであった。遊牧民だった先祖の慣習に対する否定は過去の自分を他者とみなすことに、そして接点のなかった日本に対する否定は新たな他者を確立することに繋がる。

こうした他者は、彼らの周囲に実在するものではなく、実在する集団や土地に関わる問題を理解するために行われた思索の中においてのみ現れるものである。歴史的にも現実的にも多くのものを否定すること、マイナスの出来事を他責的に捉え、敵となる他者をつくることで国内外に自己増長するのが大国の常態だとすれば、人・地・病をめぐるワールド人の口承史は共和国の輪郭の形成過程を記録する役割を担っていた。ワールド人の口承史は、彼らの置かれている民族的な現実をただ単に彼らの言葉で綴っただけのものではなく、彼らが彼らの置かれている民族的な現実をいかなる論理で受け止めているかをおのずから明かすものでもあった。

彼らは国家の民族政策の中で自分たちの存在を意味づけ、その論理で国家に対して自らの位置取りに努めているのであり、彼らの口承史には彼らの理解する集団やその集団を民族に範疇化してきた国家の輪郭を読み解く可能性を秘めていた。地域大国は、その内部に複数の集団を並存させ、外部の敵にも対峙する存在であるがゆえに、国家と少数民族との二元的関係を作り出すのではなく、

国家と少数民族との多重的な関係を生み出すからである。こうした国のあり方は、少数民族地域では民族政策を通じて社会に投影され、人々の拘りにおいて表れる。民族政策の本質は一種の虚構だと仮定するのならば、それをめぐる人々の言動も虚構なものになろう。だが、虚構に拘るのは彼らに限ったことだろうか。

注

- (1) 2008年チベット自治区ラサ市における「3・14事件」や2009年新疆ウイグル自治区ウルムチ市における「7・5事件」の衝撃を受け、中国では、民族意識を結果的に助長し民族問題を生み出してきた現行の民族政策（第一代）を改めるべきだ、との主張が表れた。民族区域自治制度に基づく少数民族優遇を特徴とする第一代民族政策は、崩壊したソ連（および東欧）の「モザイクモデル」を踏襲したにすぎず、いまこそそれを比較的的成功している米国（およびブラジルとインド）の「るつぽモデル」に転換させるべき、すなわち、民族意識の弱体化と国家意識の強化に繋がる第二代民族政策を打ち出すべきだと提唱者は力説する。胡鞍鋼・胡聯合「第二代民族政策：促進民族交融一体和繁荣一体」『新疆師範大学学报』32巻5号、2011年、1-12頁。こうした主張に反対する研究者の論点は次の通りである。中国の現行の民族政策はソ連をモデルにしているという命題は偽である。現行の民族区域自治制度をなくすべきという主張には、政治経済領域における民族集団間の事実上の不平等を単に隠蔽する以上の意味はない。異なる歴史的社会的な背景を持つ米国の民族状況を理想化することには、強制同化の悲劇を現代中国で再演する危険性がある。郝時遠「評“第二代民族政策”説的理論与实践誤区」『新疆社会科学』第2期、2012年、44-62頁；黄铸「何為“第二代民族政策”」『中国民族報』2012年1月13日。
- (2) ジューンガル帝国は、その崩壊に伴い、清やロシアが近代的な領土概念を草原地帯に持ち込み、遊牧民の自由移動が不可能になったゆえに、「最後の遊牧帝国」とされる。宮脇淳子『最後の遊牧帝国：ジューンガル部の興亡』講談社、1995年、247-248頁。
- (3) 昭榎『嘯亭雜錄』中華書局、1997年（1909年）、81頁；魏源「乾隆蕩平準部記」『聖武記 卷四』京都琉璃廠、1844年。
- (4) 馬大正・崇徳編『衛拉特蒙古史綱』新疆人民出版社、2006年、321-327頁。
- (5) シンジルト「牧畜民にとってのよいこと：セテル実践にみる新疆イリ＝モンゴル地域の自然認識の動態」『中国21』34号、2011年、135-162頁。
- (6) ジョウソ県には「民族郷」としてモンゴル族郷が2つあり、1988年現在モンゴル族

- 人口は1万1000人で県総人口の約9%を占め、カザフ・ウイグル・漢族に次ぐ第4位である。テケス県にはモンゴル族郷が1つあり、1990年現在モンゴル族は5000人で県総人口の約4%を占め、カザフ・ウイグル・漢・回族に次ぐ第5位である。ニラカ県にはモンゴル族郷が1つあり、1990年現在モンゴル族は7000人で県総人口の約6%を占め、県内第5位である。ドルブルジン県にはモンゴル族郷が2つあり、1990年現在モンゴル族は4000人で県総人口の約4%を占め、県内第4位である。昭蘇県地方誌編纂委員会編『昭蘇県誌』新疆人民出版社、2004年；特克斯県地方誌編纂委員会編『特克斯県誌』新疆人民出版社、2004年；尼勒克県地方誌編纂委員会編『尼勒克県誌』新疆人民出版社、2000年；額敏県地方誌編纂委員会編『額敏県誌』新疆人民出版社、2000年。なお、中国の民族区域自治の適用範囲は自治区・自治州・自治県の3種の行政単位に限る。憲法規定においては、少数民族が集住する地域を意味する「民族郷」には、民族区域自治を実行する権限がない。潘林『中国的民族郷』民族出版社、2001年。
- (7) 那順烏力吉「呼倫貝爾厄魯特之来源」『内蒙古社会科学』22巻4号、2001年、65-66頁；何日莫奇「黒龍江の依克明安蒙古部」『内蒙古社会科学』23巻2号、2002年、37-41頁；柳澤明「フルンボイルのウールド（Ögeled）人の来歴について」『早稲田大学モンゴル研究所紀要』2号、2005年、1-17頁。
- (8) ソムンは清朝時代の軍隊組織名から変化してきた、「村」に相当する行政組織名である。現在新疆では、ソムンはモンゴル族社会だけに見られる民間組織名になっている。
- (9) キルギス共和国イシク・クル地域や新疆イリ地区に暮らす「サルト＝カルマク Sart-Kalmuks（薩爾特卡勒瑪克）」と呼ばれる人々のことである。A. Tabyshaliev, “Kyrgyzstan,” in Madhavan K. Palat and Anara Tabyshaliev, eds., *History of Civilization of Central Asia*, vol. VI, Towards the Contemporary Period: From the Mid-Nineteenth to the End of Twentieth Century (Paris: UNESCO Publishing, 2005), p. 261; B. Z. Nanzatov, “The Oirats of Kyrgyzstan: Social, Cultural, and Identity Practices of the Sartkalmaks,” in I. Lkhagvasuren and Yuki Konagaya, eds., *Oirat People: Cultural Uniformity and Diversification*, Senri Ethnological Studies, no. 86 (Osaka: National Museum of Ethnology, 2014), pp. 155-166; 程適良「新疆薩爾特卡勒瑪克人的民族認同感与發展趨向」『中央民族大学学报』6号、1997年、32-38頁。筆者の調べた限りでは、イリ地区のサルト＝カルマク人は、約100世帯の人口を有し、ジョウソ県で暮らしており、身分証明書では「キルギス族」となっている。
- (10) カザフスタン共和国でも、カラ・ジョルガはカザフの伝統舞踊として近年知られるようになった。スターリン時代にカザフスタンから中国の甘肅省に亡命しやがてインド、パキスタンを経由して辿り着いたドイツで40年間暮らしたカザフ人アルスタ

- ン・シャデトゥル氏が、独立直後の共和国にカラ・ジョルガを持ち込んだ。氏によれば、カラ・ジョルガはかつてモンゴル舞踊だったとの言い方は間違いであるという。Jusupjan Janyl, "Dance Lost and Found" [http://kultur-multur.org/index.php?option=com_content&task=view&id=230&Itemid=2] (2015年2月13日アクセス)。
- (11) C. G. Mannerheim, *Across Asia from West to East in 1906-1908*, rev. ed. Edward Birse (trans.) (Helsinki: Otava Publishing, 2008), photo No. 6.
- (12) James D. Seymore, "Xinjiang's Production and Construction Corps, and the Sinification of Eastern Turkestan," *Inner Asia* 2, no. 2 (2000), pp. 171-193; Thomas Matthew James Cliff, "Neo Oasis: The Xinjiang *Bingtuan* in the Twenty-first Century," *Asian Studies Review* 33 (2009), pp. 83-106.
- (13) 「13の世居民族」を強調するのはウイグル人の影響力を弱体化するためだとする研究もある。Gardner Bovington, "Autonomy in Xinjiang: Han Nationalist Imperatives and Uyghur Discontent," *Policy Studies* 11 (2004), p. 28.
- (14) 頼洪波「伊犁塔蘭奇社会历史文化概論」『伊犁師範学院学報』2号, 2008年, 26-40頁。
- (15) 小沼孝博「遊牧国家の資源利用: ジューンガルにおける農耕と交易」承志編『中央ユーラシア環境史(2): 国境の出現』臨川書店, 2012年, 101-113頁。
- (16) 「中華人民共和国民族区域自治法」第3章, 自治機関の自治権, 第38条。
- (17) 中国国内では、ゲデンは新疆を中国に統一した記念碑, 中国各民族の人民が領土拡張するロシア帝国に抗戦した目撃証人だとする論考が多い。李之勤「格登碑雜考」『新疆大学学报』4号, 1981年, 67-72頁; 頼洪波「伊犁格登碑」『新疆地方志』2号, 1983年, 42-44頁; 張振中「『格登山碑』記事」『絲綢之路』4号, 2005年, 56-57頁。
- (18) 蒙古史研究室「謊言改變不了歷史: 駁蘇修篡改我国准噶爾部歷史的无耻調言」『歷史研究』2号, 1976年, 92-102頁; 白翠琴・杜榮坤「關於民族分裂主義分子阿睦爾撒納」『文史哲』4号, 1979年, 76-81頁; 馬汝珩「論阿睦爾撒納的反動一生」『新疆大学学报』Z1号, 1979年, 23-30頁; 杜榮坤「關於准噶爾歷史人物評價問題」『中国蒙古史学会論文選集』1980年, 274-284頁; 周軒「『平定准噶爾勒銘格登山之碑』碑文淺析」『新疆大学学报』4号, 1981年, 73-79頁。
- (19) 門德別列克「辺境地区重要歴史地名不能随意更改」『中国地名』8号, 2011年, 28-29頁。
- (20) 吳紹璘『新疆概観』仁声印書局, 1933年, 188頁; 孟楠「民国时期新疆蒙古族人口分布状况及数量」『西部蒙古論壇』2号, 2010年, 23-33頁。
- (21) 新疆歴史与現状系列研究総合項目編委会編『近代新疆蒙古歴史档案』新疆人民出版社, 2007年, 448頁。
- (22) 謝彬によれば, 1917年イリ地区3県の牧畜民は皆ジューンガル部族の末裔(ウール

- ド)であり, 人口は2万5889人だったという。謝彬『新疆遊記』中華書局, 1923年, 153頁。だが, 1944年イリ地区3県のウールド人口は1万2739人に激減した(内訳, ジョウソウ県6963人, テケス県1588人, ニラカ県4188人)。新疆省警務処「新疆省各県市局宗族人口統計表」甘肅省図書館書目参考部編『西北民族宗教史料文摘・新疆分冊(上)』甘肅省図書館, 1985年(原文1947年), 100-109頁。
- (23) 1940年代日本人の報告によると, 清末から民国初期にかけてフルンボイルに暮らすウールド人の間に伝染病が広がり人口が激減した。柳澤明『清朝統治期の黒龍江地区における諸民族の形成・再編過程の研究』平成16-18年科学研究費助成金研究成果報告書, 2007年, 54-55頁。中国側の研究によると, 1940年代に関東軍防疫給水部(731部隊)の率いる海拉爾支部(満洲第543部隊)が, フルンボイルなど中ソ国境地帯で化学兵器の実験を行い多数の犠牲者を出した。沈斌華「近代内蒙古の人口及人口問題」『内蒙古大学学报』2号, 1986年, 1-14頁; 卞修躍「侵華731細菌部隊及『特殊輸送』制度」『中国社会科学院近代史研究所青年學術論壇2002年卷』2002年, 188-213頁; 楊彦君「侵華日軍要塞区『特別移送』問題探討」『學理論』21号, 2009年, 118-120頁。

ISBN978-4-623-07453-2
C3331 ¥4500E

定価(本体4,500円+税)



シリーズ
ユーラシア地域大国論

5

越境者たちのユーラシア

シリーズユーラシア地域大国論 5

越境者たちの ユーラシア

MITSUO Sato and NAGANAWA Norihiro

山根 聡/長縄 宣博 [編著]

REGIONAL
POWERS
CROSS-DISCIPLINARY STUDIES

周縁の人々にとって国の輪郭とは

マイナリティ、モビリティ、ディアスポラ、ネットワーク...
中印露など地域大国の狭間に移ろう人々の姿。

ミネルヴァ書房

山根 聡
長縄 宣博 [編著]



《目次》

刊行にあたって

序 国家の輪郭と越境 / 山根 聡

I 越境と回帰

1 地域大国に生きるムスリム / 山根 聡

2 イスラーム大国としてのロシア / 長縄 宣博

II 周縁からの戦略

3 周縁から見る「イラン」の
輪郭形成と越境 / 山口 昭彦

4 二つの帝国とアルメニア人 / 吉村 貴之

III 地域大国を語る

5 「帰還民」へのまなざし / 岡奈津子

6 口承史に映る国の輪郭 / シンジルト

7 輪郭を描き出す / 小松 久恵

終 地域大国と向き合う個人 / 長縄 宣博

人名索引

事項索引